様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １３ 日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ００５０４

研究課題名（和文）フランス１６世紀前半の架空譚における建築描写の研究

研究課題名（英文）A study of architectural descriptions in fictional narratives from the first half of the 16th century in France

研究代表者
岩下　綾（IWASHITA, Aya）

慶應義塾大学・法学部（日吉）・准教授

研究者番号：４０６３３８２１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題は、新型コロナウィルス感染拡大により、建築物および資料の現地調査、国外での学会発表と研究交流が不可能な時期があったが、その間にオンライン研究会での議論や、導入が遅れていたデジタルツールでの研究推進に時間を充て、同時に修辞学を含めた理論に関する資料読解と知識のアップデートを徹底した。現地調査を再開した後は、成果を論文と口頭にて発表した。また、16世紀文学作品に関する評論の翻訳を担当し、それが一般書として刊行された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
伝説上の怪物を扱ったラブレーの戯作法に関する研究の成果は、論文と口頭で発表し、当時の文学と建築理論との共通性の例を示すことができた。特に一般参加もあった学会発表においては、好意的な評価が得られた。学術集会の組織においては、本分野に関心を寄せる各国の文学研究者との交流を図り、今後の研究協力の基盤を築くことができた。これらをもとにした16世紀文学解説、評論翻訳は、より広く国民に発信した本研究の成果だと言える。

研究成果の概要（英文）：Although the pandemic prevented field surveys of buildings and materials, as well as participation in overseas colloquia during this project, time was devoted to discussions in online research groups and research using digital tools,recently introduced in our research, while re-examining documents of rhetorical and stylistic theory. Once fieldwork resumed, the results were presented both in articles and orally. Additionally, we were able to contribute some translations of reviews of sixteenth-century literary works, which were published in the form of a book aimed at the general public.

研究分野：フランス16世紀文学

キーワード：ルネサンス　建築描写　架空譚

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

研究代表者は博士論文執筆時に、16 世紀フランスの架空譚作者フランソワ・ラブレー（1483？−1553）が、後期作品に用いた描写の構造と、当時イタリアからフランスに流入していた装飾芸術の理論とが合致することを指摘していた。造形芸術や建築を視野に入れた文学研究は、16 世紀全体を通して極めて少なく、作家別に論じる研究者は存在するものの本テーマ研究の大きな流れを作るまでには至っていなかった。他方、建築描写に関しては、英語圏ではイタリアを中心に盛んに論じられていたが、フランスにおいては少なく、美術史家による研究やデータベース構築が行われているものの、文学研究者との交流は少ない状況であった。またフランスの美術史の分野でも、虚構性を考慮した研究は少ない。また、描写技巧の研究に関しては、1980 年代からラテン語作品研究からはじまり、俗語文学に関しても数多く行われてきた。文章技巧研究に関しては豊富な先行研究を参照できる状況が整っている。こうした 16 世紀フランス文学研究の状況を踏まえ、架空譚における造形芸術の描写を考察したときに、架空譚作者の実人生で重要な役割を果たすメセナや権力者、および権力者のもとに集まる他の芸術家の存在が看取され、これらの人間関係、影響関係を考慮した上で具体的、実証的な作品分析を行うことの必要性が感じられた。同時代の政治的・社会的・宗教的背景を如実に反映しながらも、極限まで技巧を凝らして創作された架空譚において、特に権力者との結びつきが強い建築をテーマにした文学描写が、どのように現実を取り入れ、その後どのように政治・思想的役割を果たして行ったのかを、ジャンルの萌芽期である 16 世紀前半から後半の流行へと至る潮流の中で捉えることが重要であると考えられた。

２．研究の目的

本研究課題の当初の目的は、16 世紀前半の架空譚における建築描写の役割を、政治・思想・文学史の 3 つの観点から多角的に明らかにすることにあった。同時代の政治・宗教的文脈と密接に関係する建築という描写対象を、造形芸術の理論と文章技巧理論およびそれらの思想的基盤に照らし合わせ、実証的に分析することで、架空の建築描写が実社会およびその後の文学に与えた影響を浮き彫りにする。架空譚作者の実人生がメセナとしての権力者と切り離せない 16 世紀の文学は、実社会の政治および宗教に密接に関わった芸術であり、現実と虚構が互いに絡み合って成立している芸術である。そのような時代の、明確な形を持たない文字の芸術であり架空の物語を描く文学において、造形芸術であると同時に政治・宗教的な実用機能を併せ持った建築が、どのように変容し、またいかなる文学史的・社会的機能を果たすのか、ということを明らかにするという目的を設定した。

また、本研究課題のテーマに関心を持つフランス他の研究者と研究協力関係を築くこと、日本においては、16 世紀フランス文学の普及に貢献できる発表形式を模索することも本研究課題の目的とした。

３．研究の方法

（１）16 世紀前半の架空譚の建築描写の典拠を得るため、有力者によって同時代に建てられた建築物の政治的・宗教的役割を参照しながら、ルネサンス期の芸術家たちの交流を明らかにし、架空譚の著者が認知していたと考えられる建築物に、人的関係および書物的関心の双方からアプローチした。この典拠研究のために、フランスおよびイタリアの現存する建築物と記録文書の調査を行い、それらの読解を行った。

（２）建築描写に用いられる文章技巧理論(詩学・論理学・修辞学等)と造形芸術および建築理論を分析し、それらの理論に共通するルネサンス期特有の思想を検討した。理論の研究に際しては、主に文献調査とテキスト分析を調査方法とした。架空譚で用いられる「模倣」の概念の変容を時系列にそって辿りつつ、16 世紀後半の流行へといたるジャンルの思想的背景を考察した。

（３）上記 2 点の分析を踏まえて建築描写を架空譚の文脈に戻し、その社会的・文学史的意義を再検討した。具体的には、①架空譚の想定された読者、②読者に対するメッセージ、③メッセージを伝える手段(文章技巧、暗号等)の 3 点を念頭におきながら、作品の読解を行った。建築描写は政治・宗教的メッセージを含むために韜晦を極め、描写自体が一種の暗号となっているため、それらを紐解くことによって、当時の架空譚と建築描写の意義を探った。

（４）上記の読解を進めながら、フランスの 16 世紀文学研究者と連絡を密に取り、学術集会、講演会を企画することによって、研究連携の基盤を築いた。

４．研究成果

（１）本課題研究期間の前半は、新型コロナウィルス感染拡大の影響で国外での調査が不可能だったため、主に文学作品のデータベース化と読解、二次資料による政治・宗教的時代背景の調査

に集中した。コーパスとなる架空譚のうち、ラブレー著『ガルガンチュア・パンタグリュエル物語』（1532-1564)、コロンナ著、ジャン・マルタン訳『ポリフィロの夢』(1546)の当該箇所の抽出・分類・リスト化を終えた。アリオスト著、ジャン・マルタン訳『散文訳狂えるオルランド』(1544)については先行研究の収集を終え、本研究に関連する要点を把握した。

時代背景に関しては、ジャン・デュ・ベレーの『書簡集』等の文献をもとに、昨今出版が相次ぐ「伝記」（ガリマール社等）を読み解きながら、宗教戦争へと至る不寛容の時代における有力者と著作家の関係性を調査した。史実の調査から派生したものとして、史実とフィクションの概念を考察し、それらの交錯を文学テキスト中に観察した。その結果は、以前の学会発表を再考して執筆した《 La marginalité de la description chez Rabelais – la "Lampe admirable" et la "fontaine fantastique" dans le *Cinquiesme livre* 》、および《 Les visibilités étranges dans l'épisode des Papimanes 》にまとめ、それぞれ勤務校の紀要とフランスの学術誌で発表した。

ルネサンスの実在の建築に関しては、特に 16 世紀前半の王族による建築計画と建築家の文献調査、建築理論（主にウィトルウィウス、セルリオ、フィランドリエ等）の調査を行った。この時期の建築には、中世からのフランス・ゴシック建築の土台にイタリアの装飾を施すというハイブリッドな様式が散見されることから、フランスとイタリアの文化交流の概要を調査した。具体的には、フランソワ一世、アンリ二世の治世において代表的な城に関わった人物関係の整理、装飾・図像プログラム（シャンボール城、フォンテーヌブロー城など）の調査を行い、イタリア人建築家のフランスへの移動、フランス人ユマニストのイタリア訪問、その他重要人物の移動を時系列でまとめた。それらの成果は、《 Quelques notes sur le palais Farnèse de Caprarola et l'abbaye de Thélème 》、「エーグ＝モルトにおけるラブレーの足跡」として、フランスの学術誌と勤務校の紀要において発表した。

上記の調査の一要素として、王の文化政策である入市式の重要性が看取された。文学、音楽、造形芸術等の諸芸術の総合が行われる入市式は古くから行われていたが、とりわけ 1550 年前後のアンリ二世の入市式には著名な芸術家が参加しており、本研究課題の観点には重要な証言を提供しうると考えられた。本研究期間には本格的に着手するには至らなかったが、これに関する先行研究の書評を行った（「書評『ルネサンス期の文学と視覚芸術』『カイエ・ソーニエ』第３８号」、『藝文研究』、第 121 号）。これは 2020 年に開催された学会をもとにした論集で、研究代表者が参加を予定したものの新型コロナウィルス感染拡大のためにフランス渡航ができず参加を見送った学会である。

建築物と資料の実地調査を重ねるうちに、地形・地名の変遷が、文学作品にも如実に反映されていることがわかり、この観点から現存する 16 世紀の史跡と文学テキストとの照合、および同時代の文献（主に宮廷の会計書類、宗教関連の文書）の叙述との照合を行った。地域の文化とその発展に深く関連する民間伝承の 16 世紀における受容を調査し、その遺物（建築、装飾芸術、祭り等)が文学作品に取り入れられる様相を分析した。特にラブレー作品についての考察を深め、2023 年 6 月にポワトゥー地方で行われた国際学会において、《 Le château de Lusignan et Mélusine dans l'œuvre de Rabelais 》と題する口頭発表を行った。実地調査では当初予定していた以上に充実した発見があり、引き続きそれらをまとめて発表していく予定である。

（２）本研究期間前半は、フランスへの渡航が不可能になった反面、電子機器を利用した他国との交流が盛んになり、研究代表者もこの期に研究推進のための電子機器の知識をアップデートした。オンライン化された学術集会に参加し交流を図ると同時に、オンライン学術集会のメリット・デメリットと日本における今後の活用方法を学習した。これらを踏まえて、本研究期間後半には、ソルボンヌ大学と連携しいくつかの学術集会の企画を行った。2022 年には、日仏の 16 世紀フランス文学研究者にご参集いただき、各々の関心領域に関する研究発表と討論のための小規模のオンライン学術集会を開催した。2023 年 2 月には、国際ルネサンス研究連合団体の「学問とその普及」というテーマのセミナーにおいて、本団体理事とともに「ルネサンスと漫画」と題したセッションを組織した。フランス、イタリア、日本から漫画の作者と研究者にご登壇いただき、ルネサンスという時代の表現方法とその可能性、学問の普及の可能性について議論し、各国の独自性を認識した。本研究課題最終年度の 2023 年 11 月には、本研究課題に近いテーマで研究を行う各国の研究者に呼びかけて、フランス・パリのソルボンヌ大学において国際学術集会を開催した（*L'ekphrasis architecturale dans la littérature du XVIe siècle en France*)。16 世紀前半を通した文学における建築の表現についての議論を行った。日本、フランス、イギリス、アメリカ、イタリアから、若手からベテランまでの研究者が集まり、有益で友好的な議論を行うことができた。これら一連の学術集会の開催により、今後の国際的な学術交流の基盤を築くことができたと言える。今後も規模の大小を問わず、講演会等の企画も含めて定期的に開催していきたい。

（３）日本における学問の普及、日本の研究の世界への周知にも貢献すべく、日本のルネサンス文学受容史についての論文（《 Réception et intégration de Rabelais au Japon 》 sous la direction de Mireille Huchon, Nicolas Le Cadet et Romain Menini, Paris, Classiques Garnier, 2021)、ラブレー作品の学生向けの解説（「フランソワ・ラブレー『ガルガンチュア物

語』」、『フランス文学の楽しみかた』永井敦子、畠山達、黒岩卓編、ミネルヴァ書房、2021 年）、ビュトールによるラブレー作品評論の翻訳（「ラブレー」、『レペルトワール II［１９６４］』、石橋正孝監訳、幻戯書房、2021 年）等を寄稿した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 Aya IWASHITA	４．巻 538
２．論文標題 Quelques notes sur le palais Farnese de Caprarola et l’abbaye de Theleme	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Narrations fabuleuses. Melanges en l’honneur de Mireille Huchon	６．最初と最後の頁 95-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 岩下綾	４．巻 144
２．論文標題 「エーグ＝モルトにおけるラブレーの足跡」	５．発行年 2023年
３．雑誌名 『教養論叢』	６．最初と最後の頁 39-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 岩下綾	４．巻 第121号第２分冊
２．論文標題 書評『ルネサンス期の文学と視覚芸術』『カイエ・ソーニエ』第３８号	５．発行年 2021年
３．雑誌名 藝文研究	６．最初と最後の頁 28-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Aya IWASHITA	４．巻 6
２．論文標題 Reception et integration de Rabelais au Japon	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Inextinguible Rabelais, Les Mondes de Rabelais	６．最初と最後の頁 719-729
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Aya IWASHITA	4．巻 Tome LIX
2．論文標題 Les visibilites etranges dans l'episode des Papimanes	5．発行年 2021年
3．雑誌名 La Langue et les langages dans l'oeuvre de Francois Rabelais, etudes rassemblees par Franco Giacone et Paola Cifarelli, Etudes rabelaisiennes,	6．最初と最後の頁 73-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Aya IWASHITA	4．巻 145
2．論文標題 La marginalite de la description chez Rabelais -- la "Lampe admirable" et la "fontaine fantastique" dans le Cinquiesme livre --	5．発行年 2024年
3．雑誌名 教養論叢	6．最初と最後の頁 27-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　2件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 Aya IWASHITA
2．発表標題 Recherches sur les descriptions chez Rabelais
3．学会等名 Atelier franco-japonais (Atelier XVIe siecle)（国際学会）
4．発表年 2022年

1．発表者名 Aya IWASHITA
2．発表標題 Le chateau de Lusignan et Melusine dans l ’ oeuvre de Rabelais
3．学会等名 Colloque Rabelais 1523-2023 La genese poitevine d ’ un geant, Colloque international et pluridisciplinaire（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2023年

１．発表者名 Anne-Pascale Pouey-Mounou et Aya Iwashita
２．発表標題 Les ecphraseis architecturales a la Renaissance. Elements de synthese
３．学会等名 Le burin, le pinceau et la plume La litterature artistique, de l ’Antiquite a la premiere modernite（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2024年

〔図書〕　計3件

１．著者名 ミシェル・ビュトール、石橋正孝、三ツ堀広一郎、荒原邦博、中野芳彦、岩下綾、上杉未央、塩谷祐人、倉方健作、三枝大修、福田桃子	４．発行年 2021年
２．出版社 幻戯書房	５．総ページ数 360
３．書名 レペルトワールⅡ　［1964］	

１．著者名 アラン・コルバン、ジャン＝ジャック・クルティーヌ、ジョルジュ・ヴィガレロ、片木智年、小倉孝誠、後平澪子、小川直之、岩下綾、林千宏	４．発行年 2020年
２．出版社 藤原書店	５．総ページ数 760
３．書名 感情の歴史　Ⅰ	

１．著者名 永井敦子、畠山達、黒岩卓、秋山伸子、朝比奈弘治、石田雄樹、伊藤玄吾、井上櫻子、岩下綾、上杉誠、塩谷祐人、北村卓、齋藤哲也、菅原百合絵、鈴木雅生、塚本昌則、津崎良典、辻川慶子、津森圭一、内藤真奈、根木昭英、博多かおる、畑亜弥子、林千宏、原大地、福田耕介、福田美雪、村松定史、山上浩嗣、横山安由美	４．発行年 2021年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 258
３．書名 フランス文学の楽しみかた	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計3件

国際研究集会 Colloque international, L’ekphrasis architecturale dans la litterature du XVIe siecle en France	開催年 2023年～2023年
国際研究集会 FISIER ReNoV/ReNeW, Renaissance et bande dessinee / Renaissance and comics	開催年 2023年～2023年
国際研究集会 Atelier franco-japonais (Atelier XVIe siecle)	開催年 2022年～2022年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
フランス	ソルボンヌ大学			